

# 『人形の家』における「人間精神の革命」について

南 コニー

“The Revolution of Human Spirit” in Ibsen’s *《A Doll’s House》*

MINAMI Connie

## **Abstract**

Norwegian writer Henrik Ibsen's (1828–1906) social drama "*A Doll's House*" has been performed around the world for about 140 years since it premiered at the Royal Danish Theater in 1879. Even in Japan, it has been performed frequently since it was first performed at Tsubouchi Shoyo's residence, who was the chairman of the Literary Society at that time in 1911, and since then it has been widely known to the Japanese. The background that people are still attracted to this work may be that people are still fascinated by the sensational ending of Nora. However this work not only shows the issue of women's liberation, but is also a condensed work of various elements such as identity, freedom and liberation, and the relationship between individuals and society. In this paper, I focus on Ibsen's "Revolution of the Human Spirit", which is the basis of these elements, and consider it with reference to the original text.

**Keywords:** Henrik Ibsen, A doll's house, women's liberation,  
Scandinavian literature, Gender

## 要 旨

ノルウェーの作家ヘンリック・イブセン（Henrik Ibsen, 1828-1906）の社会劇『人形の家』は1879年にデンマーク王立劇場で初演されて以来、約140年間にわたり世界の各地で上演されている。日本でも、1911年に当時の文芸協会会長だった坪内逍遙宅で公演されて以来、頻繁に上演され日本人に広く知られている。現在もこの作品に人々が惹きつけられている背景には、あのセンセーショナルな結末に人々が今もなお魅せられつづけているからかもしれない。本作は、女性解放問題だけでなく、人間としての在り方、自由と解放、個人と社会の関係など様々な要素が凝縮された作品でもある。本論では、これらの要素の基盤となっているイブセンの「人間精神の革命」に焦点をあて、原文を参照しながら考察したい。

**キーワード：**ヘンリック・イブセン、人形の家、女性解放、北欧文学、ジェンダー

## はじめに

ノルウェーの作家ヘンリック・イブセン（Henrik Ibsen, 1828-1906）の社会劇『人形の家』は1879年にデンマーク王立劇場で初演されて以来、約140年間にわたり世界の各地で上演され続けている。日本でも、1911年に当時の文芸協会会長だった坪内逍遙宅で公演されて以来、頻繁に上演され、日本人に広く知られている。そうした意味では、北欧出身の作家やその作品の認知度が必ずしも高いとは言えない日本において、イブセンはデンマーク出身のアンデルセンとともに特異な位置を占めているといっていいただろう。そうした認知度や関心の高さの背景には、当時と変わらず今も人々の心を捉えて放さない作品のセンセーショナルな結末にその原因があるのかもしれない。この作品はシェイクスピア以降、世界で最も上演されているとも言われているので、内容もよく知られていると思われるが、議論に入る前にその大筋を紹介しておきたい。

弁護士の夫ヘルメルと子どもたちと何不自由のない生活を送る主婦ノーラは、かつて夫の養生旅行のために内緒で借金し、良心を痛めることもなくサインの偽造まで行っていたが、その秘密が露見し、夫から激しく叱責される。そして、その一件以後、ノーラは夫から子どもの養育に関わることを禁止され、「この世からいなくなっても構わないが世間体のために表面上の関係を続ける」、と宣告される。こうしてノーラはそれまで愛情で成り立っていると信じていた夫婦関係が見せかけに過ぎなかったことを悟る。しかし、そこに一通の手紙が届く。それはヘルメルの名誉を守るだけでなく、ノーラの借入金の事実を帳消しにすることを約束する手紙だった。安堵したヘルメルは、何事もなかったかのように機嫌を取り戻し、ノーラに再びやさしい態度で接しはじめるが、自分の出世と保身しか頭にないヘルメルの豹変ぶりに愛想をつかしたノーラは、婚姻生活のなかで自分が常に幸せを装った「人形」を演じてきたこと、夫の所有物に過ぎなかったことに気づき、「自分を取り戻す」ために、家を出る決断をする。ノーラがさようならと出て行き、扉が閉まるところで幕が降りる。

ノーラは二度と家に戻らない決心をした上で、子どもを置いて家を出た。実際はこのように家庭内の男女格差の矛盾に気づいたところで、その後の生活や子どもの将来を考えて家を出る決心がつかない女性が多い中で、自分の決断を行動に移す信念の強さと潔さに観客は圧倒されつつ称賛する。しかし、その一方で、仕事もないノーラはその後、一体どうなったのだろうか、と思わずにはいられないのも事実である。2017年、その思いに答えるかのようにアメリカ人の劇作家ルーカス・ナスが『人形の家 Part 2』と言う続編を刊行した。その舞台はノーラが家を出てから15年後の設定で、彼女が有名なフェミニスト作家となって帰ってくる場面から始まる。しかし、ここでもノーラは和解のためではなく離婚手続きを完了させるために戻ってくるのである。イブセンの『人形の家』同様、この作品も女性の経済的、精神的自立と言う問題を提起している。このように、ノーラのその後の人生の行方に想像を掻き立てずにはおかないイブセンの『人形の家』は、140年経った今もなお男女平等が未完であるように、「未完の作品」として存続するかもしれない。あるいは、ジェンダー平等だけでなく、あらゆる社会的因習や規範に囚われた男女に自らを解放する力や批判精神の目を養わせる啓蒙作品として、今後も上演され続けるのかもしれない。いずれにしても『人形の家』は同時代の西欧の女性たちに衝撃を与えたばかりでなく、自分の娘に「ノラ」と名付けた女性活動家の伊藤野枝など、多くの日本女性にも多大な影響を与えた。また田山花袋もこの作品に心酔したことで知られている。本論では、『人形の家』(Et Dukkehjem)をノルウェー語の原語から読み解き、その背景にある女性解放思想とイブセンの「人間精神の革命」について考察したい。

## 1. 『人形の家』

### —Et Dukkehjem—におけるメタファーと4つのテーマ

『人形の家』には劇全体を通して「真実」を希求する人間の姿が描かれているが、その道程は劇中の様々なシーニュとその変態によって観客（読者）に示されている。例えば劇中でノーラは冒頭から「鳥」(fugle)に喩えられるが、

あるときは「小さな雲雀」(lille lærkefugle) や「歌う小鳥」(spillefugle) であり、それらは夫ヘルメルに喜びをもたらす軽快な存在を表象している。一方、ノーラの心が夫から離れていく終盤では、彼の庇護無しには生きられないか弱い存在である「追い詰められた鳩」(forskræmte due) に喩えられている。そして、やがて飛び立つ存在としての鳥は鳥籠から自由になるノーラの解放をも示唆している。鳥はこのように物語を通して常に二人の主従関係を明確に表すモチーフとして用いられている。また主人を喜ばせる最高の奉仕としてノーラは小鳥のような軽快なダンス、「タランテラ」(Tarantella) を踊って見せる。この練習の場面でもヘルメルは、ノーラを操るかのようには批評し、指示を出しながら踊らせ続けている。「タランテラ」の起源はイタリアの町タラントにあり、その地方にある毒グモの伝説に基づいているとされる。その地方で、毒グモのタランチュラに噛まれた人間は、怠惰やヒステリーを起こす「タランティズム」という病に罹り、その毒素を解毒する為には、踊り続けなければならないとされていた。また別の説では、毒が身体中に回るその苦しさで狂ったように動き回る姿から、「タランテラ」と言う踊りができたと言われている。このような「タランテラ」と言う踊りの歴史は中世まで遡るが、その特徴は、繰り返される旋律の中で、テンポが段々と早くなり、踊り手がついていけないくらいの早さで踊り続けることが求められるということである。ピアノで「タランテラ」を奏でるヘルメルとそれに合わせて踊ろうとするノーラは、毒グモのタランチュラに操作された制御の利かない人間の身体を表している。そして踊り狂うノーラの興奮の原因は、その音楽のテンポ以外にも存在する。自分の犯した罪を暴露する手紙がヘルメルに読まれないように、ノーラはヘルメルの気を自分に向けさせようと踊り続けている。だが、「真実」を隠して嘘をつき通そうとすればするほど、ノーラは戸惑い自分を見失っていくのである。

Helmer : Men kærester bedste Nora, du danser jo, som om det gik på livet løs.  
ヘルメル : 親愛なるノーラ。まるで命がけかのように踊っているじゃないか。

Nora : Det gør det jo også.<sup>1</sup>

ノーラ：そう、命がけなの。

踊り続けなければ、夫に嘘がバレてしまい制裁を受けることになるが、たとえ踊り続けたとしても体力の限界でいつかは倒れることになる。どちらを選んでも、今のままであり続けることはできない。そうした限界状況に追い込まれているノーラの踊る姿を見て、ヘルメルは、自分の教えてやったことを全部忘れており、さらに稽古が必要だと告げて、踊りを終わらせている。ヘルメルのこの一言で救われたのは、踊ることも、踊らないことも自由に決められない操り人形のようなノーラが存在だけでなく、手紙を読む事で傷ついたはずのヘルメルのプライドと、ひとりの自立した人間としてノーラをみることができないヘルメルの古典的な男性優位論である。また、このような二人の主従関係は、かつてヘーゲルが言及した奴隷と主人の共依存と同じく、一方の解放は他方の解放をなくしてはあり得ないものである。しかし、この二人の共依存を分かち難く結びつけているのが「金」である。最初の場面では、ヘルメルに媚びてお金を乞うノーラの姿があり、それに答えるように、仕方なしに数枚の紙幣を与えるヘルメルの姿がある。「金」は女性に対する男性の優位と支配を象徴し、二人にその平等なアクセスがないものとして「不均衡」を表している。このような境遇にある専業主婦ノーラと対照的な存在がリンデ夫人である。リンデ夫人は、ノーラの古くからの友人であり、自ら生計を立てる就労経験が豊富な女性である。リンデ夫人はノーラが劇の最後の場面で望む自立を既に達成した女性として登場しており、家族の面倒を見てきた経験豊かな女性である。彼女は簿記や実務経験などお金を稼ぐ手段をもち、その力で選択の自由も手に入れている。ノーラと対照的なリンデ夫人は、ひとりで生きてゆくために職を探しており、ノーラに相談を持ちかけることで、ヘルメルが頭取を務めることになった銀行の事務員としての職を得る。またリンデ夫人は第3幕で、次のように述

---

1 Henrik Ibsen samlede værker VI bind. *Et Dukkehjem*, Henrik Ibsen, Gyldendalskegoghandel, 1879, p. 63.

べている。

Helmer må få vide altsammen; denne ulyksalige hemmelighed måfor dagen; det må kommetil fuld forklaring imellem de to; det kan umulig bli ved med alle disse fordølgelser og udflugter.<sup>2</sup>

ヘルメルさんは一切を知った方が良いでしょう。忌まわしい秘密は暴露しなくてはなりません。あの夫婦は向かい合って、何もかも話し合う必要があります。これ以上ごまかしや上塗りではやっていけないでしょうから。

ここで一切を知るとは、ヘルメル宛に出された手紙に記されたノーラの秘密のことであるが、男女の健全な関係は真実の共有を前提にしていることがリンデ夫人を介して伝えられている。また人に対してと同様に自分にも正直であることがこの作品のテーマの一つとなっている。この作品の中の重要と思われる主要なテーマは以下の通りである。

- ① 真実の追求
- ② 自己認識
- ③ 性差別
- ④ 個人と社会

①「真実の追求」は物語全体を通してのテーマとなっているが、先に述べた「手紙」は真実を告げるモチーフの一つであり、ノーラが自由になる上でのターニングポイントとなる。まさに「真理はあなたを自由にする」<sup>3</sup> と言うことであり、真理の追求なくして解放され得ないということである。またここで言うノーラの解放とは、ヘルメルとの主従関係からのみならず、「人形」としての

---

2 Ibid. p. 69.

3 ヨハネによる福音書 8章21-36節.

自分からの自己解放でもある。その解放の契機となるのが②「自己認識」である。この①、②の両方を持ち合わせているのが、ランク医師である。ヘルメル夫妻の旧友であるこの老齢のランク医師は、自らの死を悟り、ノーラにその真実を伝える。しかし、冗談だと思ふノーラは本気にせず、そんなことを言うのは悪趣味だとランク医師に伝える。すると医師は「やれやれ、わたしは人の罪を贖わねばならぬのです。天意の公正はどこにあるのか、とも言いたくなる」<sup>4</sup>とノーラに答える。これは、自らの生と向き合い、真実を受け入れる人間の報いは一体どこにあるのか、と言う観客への呼びかけでもある。その後、この医師はノーラへの長年の想いを伝えるに至る。その告白に戸惑ったノーラは、ランク医師が下等であると告げ、その場を去ろうとし、ここでも真実から逃れようとするが、心から愛すると言う事が本当に下等なのかと医師は続ける。このように、ランク医師は自己認識を持った上で真実を追求する人物として劇作に登場している。このランク医師の正直さと対照的なのがヘルメルの偽善である。第三幕でヘルメルは、ノーラに次のように述べている。

Véd du vel, Nora-Mangen gang ønsker jeg, at en overhængende fare måtte true dig, for jeg kunde vove liv og bold og alt, alt for din skyld.<sup>5</sup>

いいかいノーラ、いっそおまえの身の上に、差し迫った危険でも降りかかればいいとさえ思うよ。そうすれば君を救うために、私はすべて、身も財産も全部投げ出すよ。

そしてその直後、秘密を暴露した手紙を受け取り、窮地に立たされているノーラに対して次のように罵倒する。

Å, hvor forførdeligt jeg er vånet op. I alle disse otte år, -hun som va min

---

4 Henrik Ibsen samlede værker VI bind. *Et Dukkehjem*, Henrik Ibsen, Gyldendalskegoghandel, 1879, p. 84.

5 Ibid, p. 76.

lyst og stolthed, -enhyklerske, en løgnerske, -værre, værre, en  
forbryderske! Å den bundløse hæslighed, som ligger i alt dette! Fy, fy!<sup>6</sup>

ああ、酷く目が覚めたよ。まるでこの8年間、私の願望や誇りであった  
女が、偽善者で、嘘つきで、いや、もっとひどい、ひどい、犯罪人であつ  
たとは！ ああ、すべて何もかも底なしの汚辱だ、なんてことだ！

ノーラにとって切羽詰まった危険な状態であるにも関わらず、ヘルメルはヒ  
ロイズムの一片もなく、ノーラを救済するどころか、彼女を犯罪者扱いし、自  
分の身のみを案じている。ノーラは、彼の病を救おうとして危険な橋を渡り、  
借金をしたにも関わらず、その真実が伝わるや否や、ヘルメルにとってノーラ  
は命の恩人ではなく、一瞬にして幸福を根本から破壊する犯罪者として扱われ  
ている。そして、ヘルメルのこのような偽善と豹変が、ノーラを覚醒させる。  
家を出る決心をしたノーラにヘルメルは、夫に対する義務、子どもに対する義  
務を捨てて出て行くことは許されないと糾弾する。

Du er først og fremst hustrue og moder.<sup>7</sup>

おまえは何よりもまず、妻であり、母であるのだ。

それに対してノーラは、それと同じくらいに神聖な義務があるとヘルメルに  
告げる。

Det tror jeg ikke længere på. Jer tror, at jeg er først og fremst et  
menneske, ligeså velsom du, eller ialfald, at jeg skal forsøge på at bli det.<sup>8</sup>

私はもうそうは思いません。私は何よりもまず人間です、あなたと同じ  
人間です。と言うよりもむしろ、これから人間になろうと努力いたします

---

6 Ibid. p. 78.

7 Ibid. p. 84.

8 Ibid. p. 84.

ここでノーラは「自己に対する義務」、つまり妻や母である前に、自分がひとりの人間であること、対等なひとりの人間であるためには、自分を教育しないといけないこと、そのために「人形の家」に留まることはもはや不可能で、出てゆかなければならないと確信する。

このノーラの確信に対してしてヘルメルは、ノーラに家庭での地位がわかっていないこと、指導者は自分であると言う、家父長制の価値観に基づく性差別的な発言を繰り返す。実のところ、このような古い性別役割分担の価値観に基づく③「性差別」を表す言動や行動は劇中のいたるところで見受けられる。そして、生活と引き換えにそれらに甘んじていた人形ノーラには、自分の生きている社会が全く理解できていないと告げられる。それに対してノーラは、わかっているからこそ、自分の目で見て、自分が正しいのか、社会が正しいのか見極めなくてはならないと悟る。自らを知り、社会へと向かうノーラの揺るぎない姿勢は、イブセンの求める「人間精神の革命」に他ならない。本作の結末は、既成の社会通念や道徳、それまで神聖なものとしての結婚や宗教への挑戦ともいえるだろう。ノーラとヘルメルの最後の会話、子供たちを残して出てゆく姿は当時も今の観客にも衝撃的な場面である。しかし、ここに提示されているのは、女性の解放や自立だけではない。人間と言う大きな括りで、自分とは何者なのかを知るために、現実と向き合い、自らを教育する姿勢が人間の義務であるとイブセンは訴えている。これこそ、彼が作品を通して示した「人間精神の革命」である。イブセンは1870年12月20日に友人であり批評家であるゲーオ・ブランデス宛の手紙に、“Hvad det gælder om er Menneske aandens Revoltering”<sup>9</sup>（必要なのは人間精神の革命である）、と書いている。これは、自由、平等、博愛の形が時代と共に変容するように、革命のあり方そのものもフランス革命と同じであってはならず、約100年後を生きる著者にとってそれは、人間の精神から始まるものでなければならぬということである。つま

---

9 Samlede skrifter 3, Georg Brandes, p. 286. Gyldendal. 1898.

り、外面的な変革だけではなく、個々人の内面の変革が最も重要であると言うことである。ここに最後の④「個人と社会」のテーマが見て取れる。

個人对社会と言うテーマは、人は社会的なしがらみの中で、本当に自由な個人となり得るのか、と言う問いかけとして作品全体を通して提示されている。ノーラは、自分の置かれた環境で、与えられた性別役割分業に従事し、自らのアイデンティティや、自己決定権を放棄している多くの女性たちを代表している。そんなノーラが、ひとり人間、「個人」になり得るのは、社会的規範を無視することでしか叶わないのである。ノーラが、「私は何よりもまず人間です、あなたと同じ人間です」と言うとき、意識しているのは自立した人間精神を持っている人間である。次の項でこの「人間精神の革命」についてさらに詳しく考察したい。

## 2. イプセンにおける女性解放思想と「人間精神の革命」

ところで、『人形の家』はなぜ男性であるイプセンによって書かれたのか疑問を持つ人もいのではないだろうか。彼はジョン＝スチュアート・ミルの『女性の解放』を読んでいたとされるが、同じ男性として同時代的な女権論争に触発されたのだろうか、もしくは直接的な出来事があったのだろうか。イプセンは人間観察とその描写に多くの時間を費やす作家として知られている。ミュンヘン滞在中には、カフェ・マクシミリアンに通い、新聞越しに空間全体がよく見渡せる大きな鏡に映された客人たちを何時間も見渡していた。イプセンは自分の観察と創作についてドイツの新聞記者に次のように語っている。「自分は筆を降ろす前に、とことんまでその人物を研究する。その人物の魂の最後のひだまで見破らなければ気が済まない。私はいつも個々の人物から手をつける。舞台装置や劇全体の感じといったそう言うものは、私とその人物の人間性をあらゆる点で確実にしている限り自然にくるので、私を困らせることはない。しかし人物はその外形も、ボタンの端に至るまで、立てばどう、歩けばどう、どう振る舞うのか、その音声はどんなふうかはっきりしなくてはならない。そして彼の運命が完結するまで私は彼を手放さない」<sup>10</sup>。これは今自分の



目の前にあるものから、想像力を通して、次の瞬間そうであろうもの、あるいはそうであってほしいものへと、未来を創作していく過程に他ならない。別のところで、彼は次のようにも述べている。「[...] 私の本は未来を含んでいるんです」<sup>11</sup>。

ところで、この『人形の家』のノーラのモデルは、コペンハーゲンに住んでいた女性作家ラウラ・キエラー (Laura Kieler, 1849-1932)<sup>12</sup> である。

ラウラは、イプセンの『ブラン』に触発され、『ブランの娘達』と言う作品を書いて彼に献呈した。イプセンは彼女に礼状を書いているが、その後二人は実際に会い交流を深めている。イプセンは彼女の創作活動を支えたが、原稿の批評には厳しく、彼女が原稿の推薦文を書いてほしいと依頼してきた時には、断っている。1876年、ラウラは夫とともに当時ミュンヘンに住んでいたイプセン家を訪れる。そこで彼女は、夫が病気のためイタリアに療養に行く計画を立てているが、その費用は夫に内緒で彼女が借金したものだといプセンに打ち明ける。その後、原稿推薦を断ったことでラウラのことが気になっていたイプセンは、彼女の様子を調べるよう出版社のフレデリック・ヘーゲルに依頼する。

---

10 『新版イプセン 生涯と作品』、原千代海、三一書房、1998年、p. 227.

11 同、p. 210.

12 Laura Kieler (1849-1932) 写真出典元：<https://nordicwomensliterature.net/writers/kieler-laura-anna-sophie-muller/>

イプセンが受け取った報告によれば、ラウラは偽造文書を作成したことが夫に知られ、彼から罪人のように扱われているだけでなく、子どもの養育にも携わらないようにと命じられていた。そしてそのことが原因で心を病んだ彼女は夫によって精神病院に入院させられ、離婚請求もされていた。その後、一ヶ月ほど入院をした彼女は、離婚だけはどうか許してほしいと夫に懇願し、夫は渋々その要求に応じたと言うことであった。この経緯を知ったイプセンは心を痛め、「現代悲劇のための覚え書」に次のように記している。

二種類の道徳的掟がある。二種類の良心がある。一つは男性のもの、一つは全く違ったもので、女性のものだ。彼らは互いに通じ合わない。しかし、現実の生活では、女性は男性の掟によって裁かれる。彼女が女性ではなく、男性であるかのように。この戯曲の人妻は、最後に何が正しく、何が正しくないかと言うことがわからなくなってしまう。一方にある自然の感情と、他方にある権威の信頼が、彼女を大きな混乱に陥れる。

女性は、現代社会では独立の人格となり得ない。この社会は全く男性のものであって男性が作った掟によって、男性の立場から女性の行動が裁かれる。彼女は偽造文書をやった。そしてそれを誇りとしている。夫に対する愛情から、夫の命を救うため彼女はやったのだ。だがこの夫は、常識の目で批判し、法律の側に立って、男性の目でこの状況を判断する。道徳的葛藤。権威への信頼が押しひしがれ、混乱して、彼女は自分の道徳と、子どもたちを養育していく適性への信念を喪失する。悲痛なるもの。現代社会における母親は、ある種の昆虫と同様に、種を繁殖して義務を果たすと退いて、死んで行く。生命、家庭、夫、そして子どもたちと家族への愛。おりおり彼女は、女たちがするように肩をすくめてそう言う思いを振り切ろうとする。突如として、苦痛と恐怖が戻ってくる。すべてはひとりで背負って行くほか仕方がない。終局が無慈悲に、不可避にやってくる。絶望、抵抗、そして破滅<sup>13</sup>。

その後半年にわたり、イブセンは登場人物を掘り下げて『人形の家』を書き上げている。ただし、ノーラの結末はラウラの現実とは大きく異なるもので、自ら婚姻を解消し家を出てゆく能動的な女性の姿として描かれていた。当時の女性たちの置かれた環境を根底から覆すノーラの結末は、イブセンの権威に抗う姿勢、本来はラウラにこうであってほしいと言う願いが込められていたのではないだろうか。つまり、現実の人間の観察と想像を経て、劇中の登場人物として作り直し、その運命を掌握しているイブセンは、ノーラの自立を通してラウラの救済を試みようとしたのかもしれない。翌年の1879年、ローマのスカンジナビア協会の総会でイブセンは、二つの提案を行なっている。一つ目は、協会の図書館に女性職員を採用すること、二つ目は、総会の投票権を女性にも与えることであった。1の理由として、北欧諸国ではすでに女性が精神労働の分野に進出していること、2の理由として男性と比べて低賃金であるにも関わらず意欲的に働いている女性たちに、男性と同じ権利を与えることは当然であると言うこと。だが、結果的に、図書館職員に女性を起用する一つ目の提案は可決されたものの、二つ目の投票権については、過半数の賛成が得られず否決された。このことに憤慨したイブセンは、後日協会で行われたパーティーに出席した際にスピーチを行い大波乱を巻き起こしている。

私の提案がどう受け取られたか？ まるで罪な企てでもあるかのように否決された。しかもあの提案が向けられた女性たちは、あれにどう反応したか？ 彼女たちは裏工作をし、大声をあげて反対した。なんと言う女どもだ。女どもは悪い！ 屑より悪い！ 滓より悪い<sup>14</sup>！

普段穏やかなイブセンの震える罵声にその場が凍りついたのは言うまでもなく、驚きのあまり失神する夫人も現れたほどであった。女性蔑視と取られかねない言動のその根底にあるのは、イブセンの深い悲しみと女性たちに対する失

---

13 『新版イブセン 生涯と作品』、原千代海、三一書房、1998年、p. 200.

14 同、p. 202.

望であった。ラウラのような立場にある多くの女性たちを救うためには、女性に男性と同じ権限を与え、自立を促すことしか手立てがないことをイプセンは知っており、そのためにその機会を提案したにも関わらず、救おうとした女性たち自身の手によって無残に引きずり降ろされたのである。

ここに、今日にまで至る女性解放運動の一つの大きな問題が立ち現れている。女性解放運動の足枷となっているのは、権威主義的男性の存在だけでなく、いわゆる「名誉男性」<sup>15</sup> と呼ばれる女性たちの存在であることはかねてから示唆されているが、この「名誉男性」と呼ばれるのは、自分たちの特権的地位を保持するために、既存のシステムに抗うことを拒否する姿勢を取り続ける女性たちのことである。今日まで女性解放に多くの時間が費やされてきたにも関わらず、未だにそれが達成され得ない一つの大きな理由はそれが階級闘争と複雑に絡まり合っているからだ。イプセンと同時代を生きたドイツのフェミニスト、クララ・ツェトキン (Clara Zetkin, 1857-1933) は婦人論においてそのことを明確に提示している。彼女によれば、資本主義社会において、女性解放問題は諸階級の階級的地位に応じて別々の形を取り、大きく、①プロレタリア婦人問題、②ブルジョワ中産市民層の婦人問題、③上流社会の婦人問題に分けられると言う。端的に言えば、①の労働者階級の女性の場合は、男性との機会均等、経済的同権を勝ち取る必要性があり、②の中産階級女性の場合は、私有財産の所有者として男性と同権を求め、③の上流階級の女性の場合は、彼女のもつ財産を独立させて自由に処理する権利を求めるのである。この中で、クララはノーラのケースを②とした上で次のように述べている。

ブルジョワ婦人は単にパンを要求するばかりではなく、精神的にも十分

---

15 名誉男性 (The honorary man) はアメリカのフェミニスト作家キャロリン・ヘイルブラン (Carolyn Heilbrun) がその "Non-Autobiographies of 'Privileged' Women: England and America" (1988) で使った表現で、反フェミニスト的な態度を示す特権的な女性を指す。

生を享受し、彼女の個性を発展させようとしているのです。実際この層のなかに私たちは、あの悲劇的で心理的にも興味深いノーラの姿を見いだします。ここでは、婦人は人形の家の中かで、人形として生きることに飽き、現代文化の発展に参加しようとするのです<sup>16</sup>。

つまり、①～③の女性全体を解放する上で必要となるのは、男女の雇用の機会均等と（経済的同権）、財産の所有権及び決定権である。先に述べた、スカンジナビア協会でのイプセンの提案2は、組織運営上の投票権（決定権）を男女同権にすることであったが、これは劇中のノーラやラウラや協会の女性会員たちの所属する②ブルジョア階級女性を解放するには必須の項目である。ここにおける総会組織を社会に置き換えると、それは女性に自己決定権を保障する参政権に他ならない。それにもかかわらず、その権利を女性たちが自ら放棄したことにイプセンは失望したのである。そして、それと同じように、イプセンは、ラウラが夫に不当に罪人扱いされ、離婚請求をされたのにもかかわらず、人形のままいることに甘んじ、「人形の家」にしがみついたことに、やり切れなさを感じたのではないだろうか。

『人形の家』の中で人形として生きることに飽きたノーラは、経済的自立を余儀なくされたばかりでなく、一切の財産も持たずに人生をやり直そうとひとり家を出る。その強い意思と実践を通して、ひとりの女性としてではなく、ひとりの人間としての変革を、言い換えれば「人間精神の革命」の可能性をイプセンは提示しようとしたのではないだろうか。

ところで、この『人形の家』の上演を知ったラウラは、自分の身の上を劇作の題材にしたことに対してイプセンを糾弾するが、この一件をきっかけとして女性作家の権利を擁護すべく婦人運動に関わってゆくことになる。まさに冒頭で紹介した『人形の家』の続編のようにラウラは、フェミニスト作家、そして活動家として成長していくのである。最後に1916年1月25日に開催された第

---

16 クララ・ツェトキン『クララ・ツェトキンの婦人論』、松原セツ訳、啓隆閣、1969、p.27.

10回女性会議においてラウラが演説した貴重な資料を参照してみたい。

Jeg haaber saaledes sikkert, at Mændenes Tilbøjelighed til at stivene fast I Doktriner og Teoriers Fraser, deres stædighed til at holde fast ved dem trods al sund Fornuft, I det offentlige Live vil faa en gavnlig Modvægt i Kvindernes smidigere, mere praktiske "bon sens", som letter kan bøje sig for Realiteten og Tillempen det ønskede efter det mulige.

Men jeg tror absolut ikke, at Kvinderne vil kunne gøre Underværker og skabe "den ny Himmel og den ny Jord". Lad os ikke møde med højtflyvende Illusioner. Tiden er ikke til Illusioner. Den nøgne, barske Virkeligheds Medussansigt stirrer os i Møde. Der gælder om ikke at lade sig drive ind i Musehul af Angst for dette Ansigt, men at hærde sin Vilje til at se ind i det ansigt uden at blinke. For min egen Del har jeg ikke ønsket Kvindens Valgret, fordi hun "skulde være saa meget bedre og mere ideel" end Manden, derom kan der jo i høj Grad tvistes, men ene og alene, fordi det er hendes absolute Ret som Menneske og fordi hendes kommunale og politiske Umyndighedstilstand har været en eneste stor Uret. Der er sagens stor raison d'être. Af uret kand der aldrig komme godt. Men ondt, og Kvindens paatvungene Umyndighed har avlet meget ondt-ogsaa for Mande<sup>17</sup>.

私は確かに、男性が協議や理論にしがみつ়く傾向、常識を超えてそれに固執する頑固さが、女性のより柔軟で実用的な「良識」—現実に沿って可能な限り望ましいものを適応させること—とうまく釣り合いが取れることを願っています。しかし、私は女性が奇跡を起こし、「新しい天と地球」を創造できるなどとは全く思っていません。ありもしない幻想を見ないようにしましょう。時間は幻想のためにあるわけではありません。ありのまま

---

17 <http://www5.kb.dk/e-mat/dod/130020833174.pdf> (Tale holdt i Danske Kvinders conservative Studenter foreningen den 25. Januar 1916.)

の過酷な現実では、メドゥーサのような顔が会合の私たちを見つめているのです。私たちはこの顔を恐れて穴の中に引きこもるのではなく、意思を強固にして瞬きすることなくこの顔を見つめ返さねばなりません。私自身は、「女性が男性よりはるかに優れている」と言う理由で選挙権を望んだわけではありません。このことはかなりの程度の論争の可能性もあるかもしれませんが。私が参政権を望んだのは、それが単純に人間としての権利であり、市民としての立場や政治的無能さに不公平があるからなのです。ここに私が参政権を望む理由があるのです。善は時間任せにやってくることはありません。しかし、悪、女性が虐げられてきたこの無能さと言うのは、男性にとっても多くの悪をもたらしたのです。

## おわりに

この演説はデンマークが女性の参政権を獲得した翌年に、自らの責任と義務の名において全ての女性に投票を促す目的で行われたものである。ここで特筆すべきことは、女性の社会的・政治的無能さが、女性にとって悪であるだけでなく、男性にとってもまた等しく悪をもたらしていると言うことを明言していることである。夫の庇護に甘んじていたラウラが、約30年後に女性たちが自らの権利を行使するように、そして怯まずに立ち上がるように演説をしている姿はノーラにおける「人間精神の革命」の体現であるといえるのではないだろうか。イプセンは、「私の本は未来を含んでいる」と言っていたが、ラウラの実話をもとに鋭い観察と批判を通してノーラを創作し、そこにラウラの新しい女性としての未来を描こうとしたのである。